

# 神戸女学院音楽部レッスン帳 (1907-1923) の資料的価値とその内実

津 上 智 実

## **‘The Music Lesson Record of the Music School, Kobe College for 1907 to 1923’: Its Structure and Historical Importance**

**TSUGAMI Motomi**

### **Abstract**

This paper reports on a document newly found in the Music Library of Kobe College. It is the ‘Music Lesson Record of the Music School, Kobe College for 1907 to 1923’, which contains precise records of the music lessons in each school term, given to eighty-eight students in total, from shortly after the establishment of the Music School in 1906. Each page of this book is divided into five columns: 1) the instrument or the subject in which the lesson was given: organ, piano, singing, theory and history; 2) the exercises: the types of scales (chromatic, arpeggio), the names of keys, etc.; 3) the etudes: Czerny, Bertini, Spengler etc.; 4) the pieces: Schubert, Haydn, Chopin etc; 5) remarks: each student’s ability, character and accomplishments are reported in short phrases. In the margin, the relevant teacher names are given.

Investigations into its content and structure have resulted in the following three points:

First, it is an important primary source for the music education in Meiji and Taisho Japan, especially in one of the mission schools, of which historical researches have only been made sporadically.

Second, the entries in the record are disordered, because it also contains, in three separate parts (pages 4, 31 and 125), reports of the lessons of no later than 1900, 1901, and 1902. In addition, thirty-six sheets of paper in seventeen parts have been cut off from the book. However an examination of these anomalous parts has led to the understanding that this book was used for the first time in 1900 as a record of weekly music lessons, then almost all the used sheets were cut off, except the three sheets, and used anew from September 1907.

Third, an examination of the lesson records of the fifteen students from 1907 to 1911, that is, towards the end of the Meiji era will be a contribution to a better understanding of the music education provided by the missionary ladies, Elizabeth Torrey and Charlotte B. De Forest to Japanese young women including OGURA Suye (1891-1944).

**キーワード:** 小倉末(子)、シャーロット・デフォレスト、エリザベス・タレー、音楽教育、婦人宣教師

**Key words:** OGURA Suye, Charlotte B. De Forest, Elizabeth Torrey, music education, missionary ladies

---

本学音楽学部音楽学科教授

連絡先: 津上智実 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学音楽学部音楽学科

[tsugami@mail.kobe-c.ac.jp](mailto:tsugami@mail.kobe-c.ac.jp)

## 1)「神戸女学院音楽部レッスン帳」の存在について

近年、明治期以降の本邦洋楽史研究は大きな進展を見せ、特に軍楽隊と東京音楽学校を中心とする官立諸機関の研究が主流をなしている。一方、宣教師と教会とが日本の音楽ないし音楽教育に与えた影響については、これまで主に讃美歌研究という形で行なわれてきた。その狭間にあつて、宣教師たちが建てたミッション・スクールにおける音楽教育を論じたものは少ない。中村理平の研究がその急逝によって目次だけで終ったことは大変惜しまれる<sup>1)</sup>。その後、仙台と広島ミッション・スクールにおけるピアノ教育を論じたもの<sup>2)</sup>や、安田寛の近年の研究<sup>3)</sup>が挙げられるが、いずれも書簡や学院史に基づいたものであり、音楽教育の実態に踏み込むところには至っていない。

一つには、そのような実態を示す史料が残っていないという現実がある。図書の購入歴などが見事に残っている東京音楽学校（現在の東京芸術大学の前身）<sup>4)</sup>においてすら、当時、どの学生に対して、どのような曲を教材として与えていたかを示す史料は残っていない。そもそも、どの教員がどの学生を教えていたかを示す記録も残っていないという。私は神戸女学院出身のピアニスト小倉末子（1891-1944）の東京音楽学校における教授活動（1916年から講師、1917年から1944年まで教授）の実態を知りたいと思い、小倉末子のレッスンの記録がないかと2008年に東京芸術大学に問い合わせたところ、上記のような答えであった。

ところが、「初期神戸女学院」の授業準備のために、大学教務課の倉庫（ジュリア・ダッドレー館地下）を開けてもらって音楽教育のカリキュラムに関する古い記録を探していたところ、明治期の「生徒名簿」「学生成績簿」と共に「音楽部 学生名簿・成績簿 1907（明40）-1923（大23）」と書かれた大判の立派なノートがロッカーの引き出しの奥深くに仕舞い込まれているのを見出した。これは神戸女学院音楽部が1906年に創設された直後からの記録であり、また小倉末子の在学期間（1905-1910年）とも重なっており、大変興味深い。そこでさっそく開いてみると、その内容は表紙から想像される以上のものであった。そこには、個々の学生に対して各学期にどのような曲をレッスンしたかが克明に記載されていたのである。したがって、これは名簿というよりも「レッスン帳」と呼ぶにふさわしいものであり、明治期から大正期のミッション・スクールにおける音楽専門教育の実態を知るための極めて貴重な史料とすることができる。

本論の目的は、まずこのように貴重な史料が神戸女学院に所蔵されていることを報告し、さらにこの「レッスン帳」の構成と記載内容について整理し、そこから明治期の音楽教育の実態を解明するための手順を明らかにすることである。

なお、前述のように、このノートの表紙には「音楽部 学生名簿・成績簿 1907（明40）-1923（大12）」とあるが、その内容は「名簿」あるいは「成績簿」から一般に想像されるものとは異なり、個々の学生が各学期に学んだ教材（音階の種類や調性、練習曲の番号、楽曲の作曲者名と作品名）が記されている。そのため、今後このノートを「神戸女学院音楽部レッスン

帳」と呼ぶこととする（以後「レッスン帳」と略記）。

## 2) 「レッスン帳」の外的形態と内的形態

この「レッスン帳」は、赤いマーブル紙の表紙を持ち、大きさは横22.5センチ、縦34.5センチ、厚みが2.1センチの大判のノートである（写真1参照）。表紙の左上には「Office No. 1」の小ラベルが貼られ、中央に「音楽部 学生名簿・成績簿1907（明治40）-1923（大正12）」の張り紙がある。

表紙を開けると、中表紙には「Kobe College, Music Course, Students' Records, from September 1907（神戸女学院、音楽部、学生簿、1907年9月から）」と青いペン書きで書かれており、その筆跡はシャーロット・デフォレスト Charlotte B. De Forest 先生（1879-1973、在職1905-1950、院長在任1915-1940）のものである（写真2参照）。

中表紙を開けると、1ページ目は「Hitotsuyanagi Maki（一柳満喜）」のページであり、最上段の左側に「E. Torrey（エリザベス・タレー）」と指導教員の名前が記され、右側には「Fall Term 1907（1907年秋学期）」と学期名が記されている（写真3参照）。紙面は5つの欄に区切られており、左から「[[楽器名]]」「Etudes（練習曲）」「Exercises（指練習）」「[[楽曲]]」「[[備考]]」<sup>5)</sup>とされている。ここから一柳満喜がエリザベス・タレー Elizabeth Torrey 先生（1848-1921、在任1896-1909）の指導により1907年秋学期に、ピアノではベルティーニ Henri Bertini（1798-1876）の作品29の練習曲集<sup>6)</sup>から、第2番から第20番までの19曲、シュペングラー A. Spengler（?-?）の第3部<sup>7)</sup>よりの3曲を転調や移調を含めて学んだこと、楽曲としてはシューベルトの〈最初のワルツ〉から、ブラームス、ベンデル Franz Bendel（1833-1874）、シュピンドラー Frits Spindler（1817-1905）、そしてショパンの〈葬送行進曲〉までを弾いたことが分かる。また同じ学期にオルガンでは、スタウトン Staunton の第4巻<sup>8)</sup>とヘンリー・スマート Henry Smart（1813-1879）の作品11<sup>9)</sup>より第1番、第2番、第3番を練習し、楽曲としては〈牧歌〉のように Quasi Pastoral<sup>10)</sup>を弾いている。ページの右下には「病気のために休学していたが、1908年3月に卒業した。大変に満足できる学生<sup>11)</sup>」とコメントが書かれている。

以上から明らかなように、音楽部のレッスンにおいて、誰が誰を指導し、どの学期にどの練習曲や楽曲を学ばせたのか、さらにどのような学生だと評価していたのかまでが克明に記されており、100年前の音楽教育の実態を具体的に語ってくれる極めて重要な歴史的記録であり、正に第一級の史料である。

しかし、さらにページをめくっていくと、途中で「1900-1901年」（4ページ目と31ページ目）や「1901-1902年」（125-126ページ目）の記述のページが混在しているのに加えて、例えば、4ページ目は「1901年」、5ページ目の上半分は「1901年」、下半分は「1918年と1920年」、そして6ページ目は「1907年」の記録というように複雑に入り組んでおり、一体このノートがどのような順番で書かれたのか、どのような構成になっているのか、容易には見通すことができない。そこでまず、このノートの記載内容を整理して、その構成を理解する必要がある。

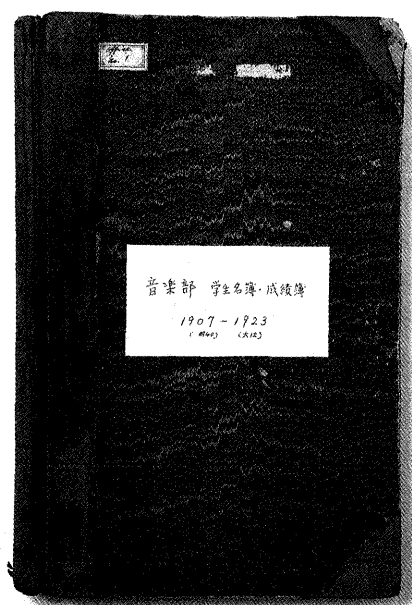


写真1 レッスン帳（表紙）

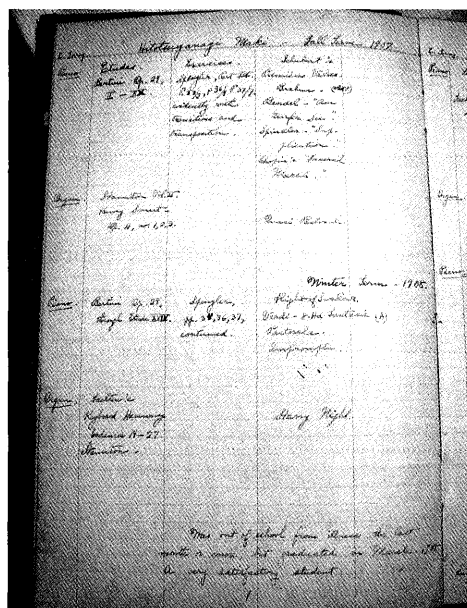


写真3 レッスン帳（一柳）

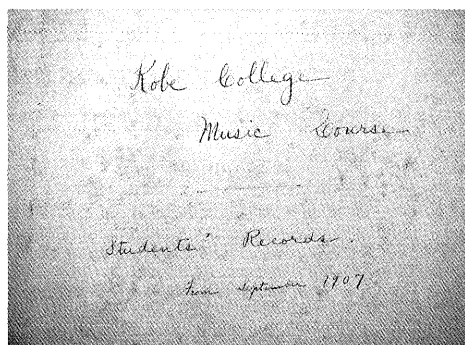


写真2 レッスン帳（書き込み）

### 3) 「レッスン帳」の記載内容と構成

「レッスン帳」の構成を明らかにするために、その記載内容を整理したのが表1『「神戸女学院音楽部レッスン帳」記載内容一覧』である（本論末尾の149-152ページに掲載）。

この「レッスン帳」のページ打ちは304ページまでであるが、3ページ目は「3a」と「3b」の2ページがあり、110ページ目は欠番となっている他、途中で切り取られた紙葉が17カ所の合計36葉あり（下記の表2を参照）、実際には117葉、234ページがある。

そこに合計88人の学生のレッスン記録が書き込まれている。年代は1900年秋学期から1923年の冬学期の23年間に及んでいる。

表2)「レッスン帳」の古層(下線部分)と切り取られた紙葉との並び

p. 3a×p. 3b : [ 1 枚切り取り ] (「×」は「間」の意)
<u>p. 4 : Nishikawa Miho: F1900, W1901 [毎週のレッスンの記録] (オルガン)</u>
p. 16×p. 25 : [ 4 枚切り取り ]
<u>p. 31, Akahori Suma: F1900 [毎週のレッスンの記録] (オルガン)</u>
p. 32×p. 37 [ 2 枚切り取り ]
p. 42×p. 49 [ 3 枚切り取り ]
p. 58×p. 63 [ 2 枚切り取り ]
p. 68×p. 75 [ 3 枚切り取り ]
p. 82×p. 87 [ 2 枚切り取り ]
p. 92×p. 95 [ 1 枚切り取り ]
p. 102×p. 107 [ 2 枚切り取り ]
p. 119×p. 124 [ 2 枚切り取り ]
<u>p. 125-126 : 永見いつゑ : S1901, F1901, W1902 [毎週のレッスンの記録]</u>
p. 131×p. 134 [ 1 枚切り取り ]
p. 137×p. 146 [ 4 枚切り取り ]
p. 149×p. 154 [ 2 枚切り取り ]
p. 157×p. 162 [ 2 枚切り取り ]
p. 163×p. 168 [ 2 枚切り取り ]
p. 175×p. 182 [ 3 枚切り取り ]
p. 185×p. 188 [ 1 枚切り取り ]

表1を見ると明らかなように、このノートはまず、1900年から1902年にかけての毎週のレッスン記録として使われ始めている。その際、その後数年間の学びについて十分な記述スペースを確保するため、一人あたり10ページ前後を割り当てたものと推測される。というのも、表1において下線を引いて示した古層(ないしはこのノート使用の第1期)(1900-1902年)の部分と、切り取られた紙葉との関係性を考えてみると、一定の間隔で並んでいると見ることができるからである(表2参照)。

この古層部分については、31ページ目の記述がよい手掛かりを与えてくれる。そこには「この記録は津田によって作られ、次のレッスンからはタレー先生が教えることになっている<sup>12)</sup>」と書かれており、1900年秋にアメリカでの一時帰休(1899-1900)を終えて神戸に帰任したエリザベス・タレー先生への引き継ぎを考えて、このノートが書かれた始めたことを示唆している。このことは、古層の他の2カ所(4ページ目と125-126ページ目)の筆跡が31ページ目の筆跡と同じであり、同じく津田幸<sup>12a)</sup>によって書かれたと考えられることによって補強される。

その後、このノートは1907年から改めてレッスン帳として用いられたと考えられるが、その第2期の使用に入る以前に、古層部分の大半は切り取られ、上述の3カ所だけが残ったものと理解される。第2期の使用においては、毎週のレッスン記録とするのではなく、学期毎の学びを記す形で用いられた。これによって各人の学びの進展がより長期的に見通せるようになり、担当教員が替わった場合にも、継続的な教育を実現することがスムーズにできたと考えられる。

#### 4) 小倉末子のレッスン仲間たち

この「レッスン帳」において興味深いのは、大正期から昭和戦前期にかけて花形ピアニストとして活躍した小倉末子を育んだ教育がどのようなものであったかが分かる手掛かりを含んでいる点である。小倉末子は1905年4月に神戸女学院に入学し、今からちょうど100年前の1910年に第27回生として「音楽部ピアノ科」を卒業している（その後、さらに一年間神戸女学院で勉学を続けている）。続いて、東京音楽学校に半年在学し、ベルリン王立音楽院で2年余り学んだ後、第一次大戦の勃発によってアメリカに逃れ、ニューヨークとシカゴで演奏してピアニストとして遇された<sup>7)</sup>。海外でピアニストとして認められた最初の日本人であると言ってよい。その音楽的基礎を与えた神戸女学院の音楽教育がどのようなものであったのかが興味の焦点である。

一方、明治期のミッション・スクールの音楽教育研究としては、小倉末子だけを取り上げたのでは不十分である。そこで、表1を手掛かりに、小倉末子が学んだ時代(1905-1911年、ちょうど明治時代末期に当たる)と一緒にレッスンを受けていた学生たちを抽出し、小倉末子を含む群像として捉える可能性を考えてみたい。そうすることによって、小倉末子の音楽教育そのものの特徴もより明確になると考えられるからである。

そこで、小倉末子が神戸女学院で学んだ6年間(1905年春学期から1911年冬学期まで)に「レッスン帳」に記載のある学生を選び出して書き抜いたのが、次の表3「小倉末子のレッスン仲間(その1:書抜き)」である。

表3) 小倉末子のレッスン仲間(その1:書抜き)

p.1:	一柳満喜:F1907, W1908 (ピアノ、オルガン:タレー)
p.2:	安福ちえ(卒業生):F1907, W1908 (ピアノ、オルガン:タレー)
p.3a-3b:	吉田博:F1907, W1908, S1908, F1908, W1909 (ピアノ、オルガン:タレー)
p.6:	安井須磨:F1907, W1908, S1908, F1908 (ピアノ、オルガン:タレー)
p.7-9:	小倉末:F1907, W1908, S1908, F1908, W1909 (ピアノ:タレー), S1909, F1909, W1910, S1910, F1910, W1911 (ピアノ:デフォレスト)
p.10-12:	喜多川よし:F1907, W1908, S1908, F1908(ピアノ、オルガン:タレー), S1909, F1909, W1910, S1910, F1910, W1911 (ピアノ:デフォレスト)
p.14-15:	永松貞:S1908, F1908, S1909 (オルガン:タレー), F1909 (オルガン:G.オルチン), S1910 (オルガン:カックロフト、ピアノ:和気のお), F1910, W1911 (ピアノ、オルガン:デフォレスト)
p.25-26:	森本縫:S1909, F1909, W1909, S1910, F1910, W1911 (ピアノ:デフォレスト)
p.28-29:	村田きくさ:S1908, F1908 (オルガン:タレー), W1909 (記録なし), S1909 (森本), F1909, W1910 (カックロフト), S1910, F1910, W1911
p.32:	Julia Song: F1909, W1910 (オルガン:カックロフト), F1910, W1911 (オルガン、ピアノ:喜多川)
p.40:	有田とし:S1910 (オルガン:喜多川), F1910 (森本)
p.51:	さわや みさお:S1910, F1910, W1911 (オルガン:喜多川)
p.57:	平尾美知:S1909, F1909, W1910, S1910, F1910, W1911 (オルガン:喜多川)
p.66:	上阪みつ:F1910, W1911 (ピアノ:喜多川)
p.76:	鈴木多津:S1910, F1910, W1911 (オルガン:森本)

以上、15名を抽出することができる。この表の記載から明らかなように、明治末期の神戸女学院音楽部においては、ピアノとオルガンの両方を学ぶのが普通であり、ピアノ科の最初の卒業生である一柳満喜もピアノとオルガンの両方をタレー先生に習っている。一方、ピアノのみを学んだのは小倉末と森本縫の二人しかおらず、例外的だったことが分かる。

指導教員については、神戸女学院の音楽部を1906年に立ち上げた功労者エリザベス・タレー先生が1909年春に離任した後、ピアノの指導は主にデフォレスト先生が担当し、オルガンの指導はジョージ・オルチン師、森本縫、喜多川よし、カックロフト先生によって担われていたことが分かる。

次に、表3の15名について、専攻および卒業年次を加えて整理すると、表4「小倉末子のレッスン仲間（その2：卒業年次および専攻）」のようになる。

表4）小倉末子のレッスン仲間（その2：卒業年次および専攻）

一柳満喜 (F1907, W1908) (第25回、音楽部ピアノ科卒)
安福ちえ (F1907, W1908) (第24回、音楽部師範科卒)
吉田博 (F1907-S1908) (「大変満足できる学生」だが「卒業前に退学」)
安井須磨 (F1907-F1908) (「欠席が多く、乏しいレッスン、不注意な奏者」)
小倉末 (F1907-W1911) (第27回、音楽部ピアノ科卒)
喜多川よし (F1907-S1911) (第24回、音楽部師範科卒)
永松貞 (S1908-W1911) (第26回、音楽部オルガン科卒)
森本縫 (S1909-S1911) (第24回、高等科卒)
村田さくさ (S1908-W1911) (第28回、音楽部オルガン科卒)
Julia Song (F1909-S1914) (修了年不明)
有田とし (S1910-F1910) (第317回、音楽部オルガン科卒)
さわや みさお (S1910-W1911) (修了年不明)
平尾美知 (S1909-W1911) (第31回、音楽部オルガン科卒)
上阪みつ (F1910-W1911) (修了年不明)
鈴木多津 (S1910-W1911) (第26回、音楽部オルガン科卒)

表4から、1909年以降オルガンの指導に当たっていた森本縫と喜多川よしの2名は、共に第24回（1907年）の卒業生であり、継続的にレッスンを受ける一方、後輩たちの指導に当たっていたことが分かる。

## 5）結論と展望

以上の考察から、「神戸女学院音楽部レッスン帳」の史料的な価値の高さと、その外的・内的形態、記述内容の構成および使用歴の一端が明らかになった。さらに今後の研究の手順も掴むことができた。

第一に、この「レッスン帳」は1907年から1923年までの16年間に及ぶ音楽部におけるレッスンの詳細な記録であり、明治期および大正期におけるミッション・スクールの音楽専門教育の実態を示す第一級の史料である。

第二に、記述の順序については、一見順不同に見える複雑な構成を示すが、このノートの使

用が第1期（1900-1902）と第2期（1907-1923）の2層から成ると考えることによって、その第1期使用分の大半が切り取られ、現在残っているのはその極一部（3カ所のみ）であり、その上で改めて第2期に巻頭から使用されたと理解することができた。

第三に、明治期における神戸女学院音楽部の専門教育の実態を解明するためには、この「レッスン帳」に記載された学生の内、1907年から1911年にかけてレッスンを受けた15名（一柳満喜、安福ちえ、吉田博、安井須磨、小倉末、喜多川よし、永松貞、森本縫、村田きくさ、Julia Song、有田とし、さわやみさお、平尾美知、上阪みつ、鈴木多津）の教育内容の検討が望ましいことが明らかになった。さらに、第1期の記述の内、切り取られることを免れた3名（にしかわみほ、あかほりすま、ながみいつえ）の教育内容と比較することによって、1906年の音楽部設立前と設立後の音楽教育の内容の変化についても、ある程度の理解が得られるものと期待される<sup>8)</sup>。

今後、表3および表4において「小倉末子のレッスン仲間」として挙げた15名の学生たちのレッスン内容に立ち入って考察することが必要である。それは自ずからタレー先生とデフォレスト先生のレッスン内容の検討という形になっていくはずであるが、これについては稿を改めて論じることとしたい。

\*この研究は日本学術振興会科学研究費補助によって支えられていることを記して謝意を表する。



表 1)「神戸女学院音楽部レッスン帳」記載内容一覧

略号：F=Fall Term（秋学期）、W=Winter（冬学期）、S=Spring（春学期）

註：1）秋学期については「Autumn」という表記も散見されるが、略号は「F」で統一している。

2）丸括弧内は（ピアノ、オルガン：タレー）というように（楽器名：指導者名）を示している。

3）囲い線は、「小倉末子のレッスン仲間」として筆者が抽出した部分を示している。

4）下線を引いた部分は、このノートブックの古層（1900-1902年）を示している。

5）隣接したページは一見開きを示し（例：1 ページ目と 2 ページ目は同じ見開き）、1 行空けたところは別の見開きであることを示している（例：2 ページ目と 3 ページ目は別の見開き）。

6）学生の氏名や曲名、評価など、レッスン帳では全て英文で記入されているが、ここでは日本語表記とした。卒業名簿等で確認ができた名前については、その漢字表記に従い、未確認の名前については平仮名書きとしている。

# 表紙+内表紙

p. 1：一柳満喜：F1907, W1908（ピアノ、オルガン：タレー）

p. 2：安福ちえ（卒業生）：F1907, W1908（ピアノ、オルガン：タレー）

p. 3a：吉田博：F1907, W1908, S1908（ピアノ、オルガン：タレー）

〔紙 1 枚が切り取られている〕（切り取られた紙には何か書いてあったことが分かるが、内容は分からない）

p. 3b：〔続き〕F1908, No record for W1909

p. 4：西川美保：F1900, W1901〔毎週のレッスンの記録〕（オルガン）

p. 5：〔続き〕/Ri: S1918（ピアノ：長谷川）/ますもと：S1920（ピアノ：ハリソン）

p. 6：安井須磨：F1907, W1908, S1908, F1908（ピアノ、オルガン：タレー）

p. 7：小倉末：F1907, W1908, S1908, F1908, W1909（ピアノ：タレー）

p. 8：小倉末（続き）：S1909, F1909, W1910（ピアノ：デフォレスト）

p. 9：小倉末（続き）：S1910, F1910, W1911（ピアノ：デフォレスト）

p. 10：喜多川よし：F1907, W1908, S1908, F1908（ピアノ、オルガン：タレー）

p. 11：喜多川よし（続き）：S1909, F1909, W1910, S1910（ピアノ：デフォレスト）

p. 12：喜多川よし（続き）：F1910, W1911（ピアノ：デフォレスト）, S1911（ヒルダ・カーティス）

p. 13：たけべ：Sept. 1913-Mar. 1914（ピアノ：森本）/おかじまちよ, S1915（ピアノ：安福）

p. 14：永松貞：S1908, F1908, S1909（オルガン：タレー）, F1909（G. オルチン）, S1910（カックロフト、ピアノ：和気のふ）, F1910（デフォレスト）

p. 15：永松貞（続き）：W1911（ピアノ、オルガン：デフォレスト）, S1911（ピアノ・オルガン：ヒルダ・カーティス）, 1911-1913（グッピーとデフォレスト）, Sep1913-Mar. 1914

p. 16：永松貞（続き）：S1914, F1914, W1915, S1915（ピアノ：デフォレスト）, F1915（ドーサー）, S1916（ハリソン）

〔4 枚が切り取られている〕

p. 25：森本縫：S1909, F1909, W1909, S1910, F1910（ピアノ：デフォレスト）

p. 26：森本縫（続き）：W1911（デフォレスト）, S1911（ヒルダ・カーティス）/たかはし：S1917（ピアノ）/こだまみちこ：F1917（オルガン）

p. 27：なかにし かずちよ：S1919, F1919, W1920, S1920（ピアノ：鴨田ます）, W1922, S1922（ロクリフ）、卒業演奏〔曲名あり〕

p. 28：村田きくさ：S1908, F1908（オルガン：タレー）, W1909（記録なし）, S1909（森本）, F1909, W1910（カックロフト）, S1910

p. 29：村田きくさ（続き）：F1910, W1911, S1911（オルガン：デフォレスト）

p. 30：くわのかよ：S1912, W1913, S1913, F1913, W1914, S1914（ピアノ）

p. 31：赤堀たま：F1900（オルガン）〔毎週のレッスンの記録〕〔この記録は津田によって作られ、次のレッスンからはタレー先生が教えることになっている〕〔p. 4 の筆跡も同じ、津田が書いたと考えられる〕

- p. 32: Julia Song: F9109, W1910 (オルガン: カックロフト), F1910, W1911 (オルガン、ピアノ: 喜多川)  
[2枚切り取り]
- p. 37: Julia Song (続き): S1911 (オルガン、ピアノ: 喜多川), Summer 1911 (Miss?), October 4, 1911-June 28, 1913 (オルガン)
- p. 38: Julia Song (続き): 同じ字、Sept. 1913-April 1914, Winter Term with C.B. Deforest
- p. 39: Julia Song (続き): S1914 (ピアノ、理論: デフォレスト)
- p. 40: 有田とし: S1910 (オルガン: 喜多川), F1910 (森本)、(松山女学校で教える)、F1916, W1917, S1917 (オルガン、ピアノ: ハリソン)
- p. 41: Wo Be-lan: S1914 (ピアノ、理論: デフォレスト) / So Rei-shun, F1914 (オルガン: 安福) (戦争のため休学) F1917 (ピアノ、理論: 鴨田)
- p. 42: 長谷川ツヤ: S1915, F1915 (ピアノ、和声、歴史: デフォレスト、声楽: 秋元), W1916, S1916, F1916 (ハリソン)  
[3枚切り取り]
- p. 49: 長谷川ツヤ: W1917, S1917, F1917, W1918, S1918 (ピアノ、理論: [ハリソン])
- p. 50: 長谷川ツヤ: F1918 (ピアノ: [ハリソン])
- p. 51: さわや みさお: S1910, F1910, W1911 S1911 (オルガン: 喜多川)
- p. 52: さのしず (金井夫人、Mrs. Kanai): F1912, W1913, S1913, F1913, W1914 (ピアノ、声楽、理論: 森本)
- p. 53: [続き]: S1914 (ピアノ、理論、歴史: 安福), F1914, W1915, S1915 (デフォレスト), F1915 ([ハリソン])
- p. 54: 馬場操: S1916, F1916, W1917, S1917, F1917, W1918 (オルガン、聴音、和声、ピアノ: 安福)
- p. 55: [続き]: S1918, F1918, W1919, (no record of S, F1919, 大阪の自宅から週2回レッスンに通ってきた), W1920 ([ハリソンか?])
- p. 56: 金井静 (53ページからの続き): W1920 (ピアノ: [ハリソン?])
- p. 57: 平尾美知: S1909, F1909, W1910, S1910, F1910, W1911 (オルガン: 喜多川)
- p. 58: 平尾美知 (続き): S1911 (オルガン: 喜多川) / えだもとちよ, F1914, W1915 (オルガン、理論、歌唱: 永松)  
[2枚切り取り]
- p. 63: 花田花: S1915, F1915, W1916, S1916, F1916 (ピアノ、音楽史、和声: 安福)
- p. 64: 有田とし: (40ページからの続き): S1917, F1917, W1918, S1918, F1918, W1919, S1919 (ピアノ、オルガン、歌唱、和声、音楽史: ハリソン)
- p. 65: 有田とし: F1919, W1920, 卒業演奏会 [曲目あり]
- p. 66: 上阪みつ: F1910, W1911 S1911 (ピアノ: 喜多川)
- p. 67: 石川静: S1914, F1914, W1915, S1915, F1915 (ピアノ、理論: 永松)
- p. 68: 石川静: S1916, F1916, W1917 (永松), S1917, F1917 (安福)  
[3枚切り取り]
- p. 75: [白紙]
- p. 76: 鈴木多津: S1910, F1910, W1911, S1911 (オルガン: 森本)
- p. 77: 藤田トキ: S1915, F1915 (オルガン、ピアノ、鍵盤和声: デフォレスト) (和声) (声楽: ドーシー、長谷川), W1916, S1916 (オルガン、ピアノ: ハリソン)
- p. 78: 藤田トキ (続き): F1916 (オルガン、ピアノ), W1917 (1コマ分の長さの卒業演奏), S1917, F1917, W1918, S1918 (ピアノ: [ハリソン])
- p. 79: 藤田トキ (続き): F1918, W1919 (ピアノ: [ハリソン])
- p. 80: つしましずえ: S1911 (オルガン: 森本)
- p. 81: Ryo Syukke: S1914, F1914, W1915, S1915, F1915 (ピアノ、理論: 永松), S1916, F1916 (ハリソン)
- p. 82: Ryo Syukke (続き): W1917, S1917, F1917, W1918, S1918, F1918 (ピアノ: [ハリソン])  
[2枚切り取り]

- p. 87: Ryo Syukke (続き) W1919, S1919 (初回のレッスン後、全学期にわたって中国に滞在)／横山用: S1920 (ピアノ: ハリソン)／わつじ: S1920 (ピアノ: 鴨田)／横山用 (続き): F1920 (オーケリー)
- p. 88: 横山用: W1921, S1921,
- p. 89: [白紙]
- p. 90: [白紙]
- p. 91: 佐野幸: S1914, F1914, W1915, S1915, F1915 (ピアノ、歌唱、音楽史と和声: 安福)
- p. 92 [続き]: W1916, S1917／半沢てる W1917, S1917, F1917, W1918 (オルガン、ピアノ、音楽史: ハリソン)  
(歌唱: 秋元)  
[1枚切り取り]
- p. 95: 半沢てる: S1918, F1918 (ピアノ、オルガン: [ハリソン])／さとうちよ: S1918, F1918, W1919, S1919  
(ピアノ、オルガン: 永松)
- p. 96: 河野きみ: S1920 (ピアノ、和声、音楽史: はせべ), W1922 ([ピアノ]: ロクロフ)
- p. 97: [白紙]
- p. 98: いわさきやつ: S1914 (オルガン、歌唱: 安福)／野呂八重: S1915, F1915 (ピアノ、和声、声楽: 安福),  
W1916, S1916 (ピアノ、和声、音楽史、歌唱、聴音: ハリソン)
- p. 99: 野呂八重 (続き): F1916, W1917, S1917, F1917, W1918, S1918 (ピアノ、和声、音楽史、歌唱、聴音:  
[ハリソン])
- p. 100: 野呂八重 (続き): F1918, W1919, W1919, S1922に再入学 (ピアノ、和声、音楽史、歌唱、聴音: [ハリ  
ソン])／はらだ (ピアノ: [ハリソン])
- p. 101: [白紙]
- p. 102: ふじばやしあい (Mrs.): S1914 (ピアノ、歌唱: 安福)  
[2枚切り取り]
- p. 107: 浅野ふみ: F1914, W1915, S1915 (オルガン、歌唱、ピアノ: デフォレスト)
- p. 108: もりとも: F1915 (ピアノ: 秋元)／たけがわちよ: S1919 (ピアノ、歌唱、音楽史、和声: [ハリソン])／  
おかひらみち: S1920 (ピアノ、和声、音楽史、トニック＝ソルファ: [ハリソン])
- p. 109: [白紙]  
[p. 110は欠番]
- p. 111: にしじまちわ: S1915, F1915 (オルガン、理論、ピアノ: 永松)／もりやまとみ: F1916, W1917 (オルガ  
ン、和声: 秋元)
- p. 112: もりやまとみ: S1917, F1917, W1918 (オルガン、歌唱、和声、ピアノ: 秋元), S1918, F1918 (長谷川)
- p. 113: おおたのぶ: F1916 (オルガン、理論: 秋元)／しんかいしげ (続き) (声楽、ピアノ): W1919／菅沼か  
つ: S1919, F1919, W1920 (オルガン、歌唱、ピアノ、合唱、和声、音楽史: 永松)
- p. 114: 菅沼かつ (続き): W1921+22, S1922 (オルガン、ピアノ)、卒業演奏 (演奏曲目あり)
- p. 115: みわふじ: S1915, F1915 (ピアノ、音楽史、理論)
- p. 116, Ro Rai Chi: (理論、Tamura's text-book of Musical Grammar, 1-68)／かどた: S1917 (ピアノ、歌唱)／や  
まのいよしの: S1920 (ピアノ、和声、音楽史: やまおか)
- p. 117: [白紙]
- p. 118: [白紙]
- p. 119: Tei: F1915, W1916, S1916, F1916, W1917, S1917, F1917, W1918 (ピアノ: 長谷川)  
[2枚切り取り]
- p. 124: Tei: S1918, F1918, W1919, F1920, W1920 (ピアノ: [長谷川]), S1920 (イルズレー)
- p. 125: 永見いつゑ: S1901, F1901 [毎週のレッスンの記録] ([津田])
- p. 126 [続き]: W1902 ([津田])
- p. 127: 鯨岡絹: S1916, F1916 (オルガン、ピアノ: 永松)、(1年余り松山で教える) S1918 ([ハリソン])
- p. 128: 鯨岡絹: F1918, W1919, S1919, F1919, 1920 (オルガン、ピアノ: [ハリソン])

- p. 129 : もりやまとし : S1916 (オルガン : 秋元) / つじあや : S1917, F1917, W1918 (ピアノ、歌唱 : ハリソン)
- p. 130 : つじあや (続き) : S1918, F1918, W1919, S1919, F1919, W1920 (ピアノ、歌唱 : ハリソン)
- p. 131 : つじあや (続き) : S1920, F1920 (イルズリー夫人の下で数年働く) F1921, W1922, S1922, F1922  
[1枚切り取り]
- p. 134 : つじあや (続き) : W1923 (ピアノ、歌唱 : ハリソン)、リサイタル・プログラム [曲名あり]
- p. 135 : みやもとゆき : S1917, F1917 (ピアノ、理論、和声 : 長谷川)
- p. 136 : みたまらなおみ : W1921, S1921 ([ピアノ] : イルズリー), F1921, W1922 (ピアノ : ロクロフ)
- p. 137 : つかもとふみ : S1921, F1921, W1922, S1922, F1922 (ピアノ : イルズリー)  
[4枚切り取り]
- p. 146 : [白紙]
- p. 147 : [白紙]
- p. 148 : [白紙]
- p. 149 : [白紙]  
[2枚切り取り]
- p. 154 : 浅野ふみ (107ページからの続き) [第40回、師] : W1922 (オルガン、ピアノ : ロクロフ)
- p. 155 : きむら : S1922, F1922, W1923
- p. 156 : [白紙]
- p. 157 : じょうすえ : S1922, F1922, W1923  
[2枚切り取り]
- p. 162 : [白紙]
- p. 163 : [白紙]  
[2枚切り取り]
- p. 168 : 野崎 : S1922, F1922, W1923,
- p. 169 : 小林シホ [第40回、Or] : S1922, F1922, W1923 (長野)
- p. 170 : [白紙]
- p. 171 : [白紙]
- p. 172 : [白紙]
- p. 173 : [白紙]
- p. 174 : [白紙]
- p. 175 : [白紙]  
[3枚切り取り]
- p. 182 : [白紙]
- p. 183 : [白紙]
- p. 184 : [白紙]
- p. 185 : [白紙]  
[1枚切り取り]
- p. 188 : [白紙]
- [p. 189-300まで、全て白紙、切り取りなし]
- p. 301 : 卒業生一覧 (Graduates) 1907 (師範科) : 松井愛、喜多川よし、安福ちえ、1908 (ピアノ科) : 一柳満喜、  
1909 (オルガン科) : 永松貞 (1913、師範科)、1910 (ピアノ科) : 小倉末、1911 (オルガン科) : 村田きく  
さ、1914 (オルガン科) : Julia Song, 1917 : 藤田トキ、1919 : 野呂八重、1920 : (オルガン科) 金井静、(師  
範科) 馬場操、有田とし、鯨岡絹、1922 : 菅沼勝、1923 : (オルガン科) 浅野ふみ、(ピアノ科) つじあや、  
1924 : 門田みおこ
- p. 302 : [白紙]
- p. 303 : [白紙]
- p. 304 : 索引

## 注

- 1) 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』（大空社、1996）。
- 2) 坂本麻実子「明治末期の地方ピアノ界とプロテスタント系女学校—仙台と広島的事例から—」『桐朋学園大学研究紀要』第24集（1997）、27-44頁。
- 3) 安田寛「アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史」『キリスト教社会問題研究』第46号（1998）、25-73頁。同「京都と神戸ステーションの音楽教育史」『同書』第47号（1998）、30-80頁。同「神戸女学院の音楽教育史」『同書』第51号（2002）、189-212頁。
- 4) 東京音楽学校の図書購入歴については、大角欣矢（代）東京芸術大学楽理科『近代日本における音楽専門教育の成立と展開 平成17～19年度科学研究費補助金 研究成果報告書』（2008年）を参照。
- 5) 4-5ページ目（1900年の西川みほの項）では「Dates」「Finger Exercises & Scales」「Studies & Pieces」「Organ Harmony」「Remarks」、8ページ目（1909年の小倉末子の項）以降は「Piano」「Exercises」「Studies」「Pieces [作曲家名]」「[曲名]」とされている。
- 6) H. Bertini, *Clavier Etuden für die Mittelstufe*, op. 29, Litolf, n.d.
- 7) Spengler, *System of Technic for the pianoforte*, (ca. 1887). このピアノ教則本は、当時の複数の学生たちが学んだものであるが、現在の神戸女学院大学図書館には所蔵がない。国内の図書館で見つけることができなかったため、米国ウィスコンシン大学図書館から資料の提供を受けることとした。
- 8) Staunton の曲集については詳細未詳。
- 9) Henry Smart: *Original Compositions for the Organ*. 神戸女学院大学音楽学部図書室に残る楽譜は元の表紙が取れてしまい、タイトルを手書きした青い紙が表紙とされているため、出版年などの詳細は不詳である。この曲集は、一柳まきの他、安福ちえ、永松貞のレッスンでも用いられたことが「レッスン帳」から読み取れる。
- 10) 〈牧歌のように Quasi Pastoral〉は、スマートの上述の曲集（注9参照）の第8曲で、当時の複数の学生たちが弾いている曲である。
- 11) 'Was out of school from illness the last months or more, but graduated in March 1908. A very satisfactory student.'
- 12) 'This record was made by Tsuda & Miss Torrey is going to teach from next lesson.'
- 12a) 津田幸は1900年1月から12月まで、1922年9月から1924年7月までの二期、神戸女学院の音楽教師を務めた。『学院史料』第21巻（2006年）13頁による。
- 13) 小倉末子の生涯については以下を参照されたい。津上智実「読売新聞に見るピアニスト小倉末子（1891-1944）」『神戸女学院大学論集』第55巻第2号（2008年、12月）53-68頁。同「旅するピアニスト—小倉末子の朝鮮演奏旅行」『神戸女学院大学女性学評論』第23号（2009年3月）、66-91頁。同編著『100年前の卒業生：ピアニスト小倉末子の軌跡展』図録（2010年10月1日発行）。
- 14) もっとも、このノート使用の第1期（1900-1902年前後）において記載された学生数は、上述の切り取り箇所を考え合わせると、20名前後あったと推測される。その内、今残っている記録はわずか3名分であるから、比較の有効性は限定的とならざるを得ない。

（原稿受理 2010年9月21日）